

[26]

氏名	河崎 俊博 ^{かわさき としひろ}
博士の専攻分野の名称	博士 (心理学)
学位記番号	心博第 31 号
学位授与の日付	2019 年 3 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	傾聴における相互リフレキシブモデルの研究
論文審査委員	主査教授 池見 陽 副査教授 串崎 真志 副査教授 久保田 進也 (九州産業大学)

論文内容の要旨

本研究は、本研究の問題意識と目的、傾聴に関する文献的研究を提示する「第 I 部 理論編 (第 1 章、第 2 章、第 3 章、第 4 章)」、実践上の問題意識から傾聴を検討し、理論と実践をつなぐ「第 II 部 理論と実践をつなぐ架け橋編 (第 5 章、第 6 章)」、実際のセッション記録をもとにした新たな実践方法の検討を主とする「第 III 部 実例編 (第 7 章、第 8 章)」、これらの議論に関する総合的考察を主とする「第 IV 部 総括 (第 9 章)」の 4 部から構成されている。

第 1 章では、傾聴がどのように理解されているのかを把握する目的で、傾聴に関する辞書的な意味や研究者たちの解説を概観した。Carl Rogers、Eugene Gendlin と傾聴との関連に触れながら、近年では、傾聴におけるセラピスト側の体験に着目する研究報告が増えていることを示唆した。次に、辞書的定義やカウンセリング辞典に記述されている傾聴の定義、傾聴研究の臨床心理学的意義、Rogers が提示した中核 3 条件と傾聴との関連を参照し、本研究における傾聴を定義した。こうした概観から、本研究では、Carl Rogers の実践や傾聴の諸側面を、Eugene Gendlin が提唱した体験過程理論 (Theory of Experiencing) やその実践であるフォーカシング (Focusing)、Gendlin の考えを推進している池見陽氏の Combodying 論の観点から捉え直し、心理療法やカウンセリングの基本的な援助法として相互リフレキシブな傾聴を提唱することを目的とした。

第 2 章では Carl Rogers の実践に着目し、Rogers の実践をパーソン・センタード・アプローチの発展区分 (Hart, 1970) に沿って論考した。Hart (1970) によれば、Rogers の実践は、非指示的療法時代 (1940 年～1950 年)、リフレクティブ・サイコセラピー時代 (1950 年～1957 年)、体験過程療法時代 (1957 年～1970 年) に分けられる。本章では、非指示的療法時代とリフレクティブ・サイコセラピー時代を中心に検討を進めていき、それぞれの時代の特徴を明らかにした。次に、Rogers の傾聴を特徴付けたリフレクション応答に着目し、

彼の著作をもとに文献的に検討した。その結果、Rogers がリフレクションを解説していたのは、非指示的療法時代に限定されており、Rogers がリフレクションを解説する場合には、「態度のリフレクション (Reflection of attitudes)」と「気持ちのリフレクション (Reflection of feelings)」という表現があることに注目した。

第 3 章ではリフレクティブ・サイコセラピー時代以降、Rogers が傾聴の実際について語らなくなり、代わって体験過程療法時代の担い手として頭角を現した Gendlin に着目し、彼の傾聴解説や、Gendlin 以降のパーソン・センタード・セラピストたちの実践を検討した。その結果、体験過程療法時代では、Gendlin の概念である体験過程が注目され、傾聴理解にもそれが取り入れられていることが明らかになった。また、Gendlin の傾聴解説の検討から、Gendlin がいう傾聴には、「絶対傾聴」、「ガイド等を活用した傾聴」、「セラピストの体験を活用した傾聴」の 3 つの側面があることが見出された。加えて、近年の体験過程療法時代では、セラピストの体験や関係性が注目されており、体験過程の概念が注目された当時の体験過程療法時代とは強調点が異なることから、時代が移行しつつあることを指摘した。

第 4 章では 1942 年の Rogers、そして Gendlin が重用したリフレクションに着目し、Rogers や Gendlin 以降の研究者たちの文献も含め、リフレクションから観た傾聴の諸側面を考察した。その結果、傾聴には 5 つの側面があることが見出された。リフレクションから観た傾聴には、「態度や気持ちを指し示すもの」、「セラピストの理解」、「体験過程の推進」、「鏡」、「出会い(共創)」としての側面があり、実際の傾聴やセラピー場面では、一つの側面だけが機能している場合もあれば、複数の機能が発生している場合が示唆された。また、「出会い(共創)」としての側面は、セラピストのフェルトセンスを伝えるという点で、他の側面とは異なっていることを指摘した。

第 5 章では理論と実践をつなぐ架け橋として、傾聴の実践場面を想定し、実際の逐語記録の一部をもとに、傾聴の検討を行った。具体的には、前章で検討してきたリフレクションに着目し、実際の傾聴場面で行われるリフレクションは、どのような場合に体験過程促進的になりうるのか、これまでの知見も踏まえ、いくつかの逐語例を用いて考察した。検討の結果、クライアントとセラピストの双方がフェルトセンスを軸に振り返るという在り方が、最も体験過程促進的に、心理療法や傾聴を進めていく可能性があると考えられた。本研究では、その在り方を「相互リフレキシブ・モード (Co-reflexive mode)」、あるいは「相互リフレキシブな営み (Co-reflexive dialogue)」、「相互リフレキシブな傾聴 (Co-reflexive listening)」と呼ぶこととし、傾聴における「相互リフレキシブモデル (Co-reflexive model)」を提唱した。

第 6 章では、「相互リフレキシブな営み」を考案するにあたり、背景となった諸概念に触れ、相互リフレキシブな営みが、いかに「からだ」と関係しているのかを論考した。「相互リフレキシブな営み」は、クライアントとセラピストの両者の「からだ」を軸に進む。その「からだ」は、前反省的に状況と相互作用しているため、「からだ」は相互作用その

ものである。また、「からだ」を振り返って観て、言い表すことによって、「からだ」は変化する。これらのことから、「相互リフレキシブな営み」では、クライアントとセラピストの両者が振り返って観て、両者が言い表すことによって、両者の「からだ」が変わっている。それゆえに関係の様式も変化すると考察された。

第 7 章ではこれまで検討してきたことの実例編として、「相互リフレキシブな傾聴」が、実際のセッション場面でどのように観られるのかを検討した。本章では、フォーカシング簡便法のセッション記録を提示し、相互リフレキシブな傾聴の意義を論じた。「相互リフレキシブな営み」が観られた箇所は、研究協力者の体験報告からも意義深いものであったことが報告され、「相互リフレキシブな傾聴」実践の可能性が示唆された。

第 8 章では傾聴セッションの逐語記録を提示し、「相互リフレキシブな傾聴」の意義を検討した。検討の結果、前章のフォーカシング簡便法のセッションとは、セッション形態が異なるものの、「相互リフレキシブな営み」において、理解の進展が観られた。研究協力者からは、「相互リフレキシブな営み」が観られた箇所が、最も理解されたと感じたとの報告を得、話し手による意義も確認された。また、本セッションにおいては、リフレクションよりも、「相互リフレキシブな営み」の方が理解された感じがあったとの体験報告があり、それは「出会い」から生じたものであることが示唆された。

第 9 章では以上の知見を踏まえたうえで、本研究の総括を行い、続いて、本研究における課題と今後の展望について検討した。

論文審査結果の要旨

本論文は日本では必ずしも十分に理解されていない傾聴に焦点を当てたものである。そもそも「傾聴」という言葉も日本で作られたものであり、それは特別な方法を指すもののように受け止められがちだが、英語では **Listening** すなわち、「聴いている」という平易な動詞なのである。日本で解説されてきた傾聴ではなく、本研究は **Carl Rogers** や **Eugene Gendlin** の文献に示される **Listening** を追求し、その過程から著者河崎氏独自の「相互リフレキシブ」という視点に至るものである。この観点はオリジナルなものであり、これを見出したことによって傾聴の理解がアップデートされることに学術的な意義があると思われる。以下、本研究科が定める「博士論文審査基準（課程博士）」にしたがって、審査委員の見解を記述する。

(1) 問題意識が明確で、課題設定が適切であること

「傾聴」に焦点が絞られた研究であり、傾聴の理解に関する問題意識は明確で適切である。

(2) 国内外の先行研究を適切に検討、吟味していること

本研究では、Carl Rogers, Eugene Gendlin など「傾聴」を提唱した心理療法家たちの著作や論文を文献的に研究しており、それらの文献を正確に理解して、傾聴の意義について適切に検討、吟味している。

(3) 研究目的に照らして研究・分析の方法が適切であること

本研究で用いられている研究方法は2つである。そのひとつは文献研究であり、傾聴の意義を歴史的に捉えるためには、これは適切な方法であると思われる。もうひとつの研究方法は逐語記録による検討である。実際の面接場面を録音して、その記録から研究する方法は Carl Rogers によって始められたものであり、傾聴の研究にはとくに適した方法である。

(4) 論文構成が的確で、論理展開に整合性、一貫性、説得性があること

本研究の論文構成では、Carl Rogers の非指示的心理療法の時代、リフレクティブ・サイコセラピーの時代、体験過程療法の時代と傾聴の理解の変遷を追っていき、その後の研究者の著作や論文へと進んでいる。そのような傾聴史の捉え方には一貫性があり説得性がある。

(5) 全体を通して社会的・学術的な独創性が認められること

本研究で見出された「相互リフレキシブ」の観点はオリジナルな観点であり、それを見出したことに独創性が認められる。また、『心理臨床学研究』の最新号に掲載されている論文(櫻本 2018)には本研究と類似した着目点が論じられており、本研究が見出している観点は現在顕在化しつつある傾聴の新しいトレンドなのかもしれない。

(6) 国内外の学会や社会に対して貢献が認められること

河崎氏は本研究の一部を学会誌『心理臨床学研究』や日本人間性心理学会での口頭発表、さらに、International Focusing Conference (Switzerland) で報告しており、学会や社会に対して貢献している。

これらによって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。